



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十八年四月二十五日 印刷
昭和二十八年五月一日 発行

大菩薩峠（第十九巻）

定価三百八十円

送料 三〇円

著作権者 中里幸作

発行者 中里幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森高繁雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

電話 神田二二三六四番
振替 東京一九三九六七番

（乱丁、落丁はお取替いたします）

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
十
九
卷

序 文

大菩薩峠の第十九冊「山科の巻」を世に出すことになった。

「山科の巻」と題したのは別に全體的な意味ではない、前冊「京の夢、逢坂の夢の巻」が、題名の物々しいに似ず、京にも逢坂にも觸るゝこと少なかつた憾あるを以て、これから、また舞臺が京洛の天地に入らうとするに先立ち、その前奏曲としての「山科の巻」と見てもよろしい。

日本は今、空前の難局面に歩一步と進入してゐる。小説どころではあるまいといふも一説だし、大なる文學を以て、人心を潤ほすの必要いよゝ切實なりといふも一説である。

わが大菩薩峠の如きは、これを運用する方法宜しきを得さへすれば優に國民文學の使命を果し得るものだといふも一説である。這の冗漫放曠限りなき愚作を呪へといふ

も一説である。何にせよ、存在するものには、皆意義があり使命がある。樗櫟だもなほ大を成す況んや、といふも一説である、「悪しくあしらひなば悪しかるべし」といふも一説である。

著者として、この種の文字をつくることは朝飯前である（事實、大てい、午前二時頃に起きて執筆する、）この點は悠々自若たるものである、老境に入らんとするにつれて筆路いよ／＼伸張する心持がある、これがよく抜ければ「心の欲するところに従つて矩を踰えず」である、つとめて大菩薩道に遊んで、魔外邪道には行くまいとは心がけてはゐるが、天性の疎懶は如何とも致し難い。

じつくりと構へて文と想とを練つて書き度い事、山々だが、この巻も僅か一ヶ月で書き上げて、一年中の片手間仕事に了つた、校正に當つて讀み返して見ると、イヤどうも冷汗淋漓、數十枚を一度に割取して捨て度い思ひばかりだが、これまた如何とも致し方無い。

斯様の片手間仕事に済ました著者の一ケ年の讀書のうちに、馬琴の八犬傳の通讀と紅葉全集の通讀とがあつた。八犬傳は少年時代におなじみの書物ではあるが、今年特に、天保版の原本、百六冊を手に入れたから、頭からしまひまで、ムシヤ／＼と讀み終つた。正直のところ、この日本の先輩の大作家の隨筆や記行文には受くるところ相當に多いが、大菩薩峠の著者も、その代表作八犬傳から受くるところのものは何物も無い。のみならず時とすると多大なる厭惡と臭氣とを辛抱しつゝ讀み了つたといふ次第である。

紅葉山人の文章には、いつもながら、感服する。文章家としてこの人は、馬琴よりも近松よりも、西鶴よりも優れ、平家、太平記の古文をしのぐものさへある。この人は日本に於ける古今第一の文章家として見ても不可はないと思ふ。それともう一つ、會話の絶妙なるに敬服した、特に男女間の痴話情話の受渡しに於ては、天衣無縫にして、入神の技倆ある事に感服する。然し、全集を通讀すると、息切れがあつたり、す

き切れがあつたり、時には、此處はてつきり、誰か弟子共の代作と思はれるやうな部分もないではない、完璧といふものは誰を人にしてもなか／＼得難いものだと思はしめられた。

馬琴も紅葉も、それから紅葉以後の小説の唯一の大家夏目漱石も、不思議と皆、江戸人である、この點から見ると「海内の小説江戸つ子に歸す」といひたくなる。大菩薩峠の著者は江戸つ子では無い關東土著のお百姓である。その創作力と、識見の多少といったやうなものにかけては、これ等の先輩と雖も、敢て譲らない自信はあるけれども、紅葉のやうなアクの抜けた文章の妙と會話の練熟だけは到底企て及ばないことを痛感せざるを得なかつた。

さて、紀元二千六百年の大日本、各方面に於て、空前の盛事を示してゐるが、創作だけは駄目で、文化勳章の御制定があつても、現役の創作界でこれに當るものが一人も無いといふ悲惨事である。紅葉、漱石の如きがあれば問題ではあるまいが、これが

無い。幸田露伴が過去の人であつて、現役の作家で無いことは申すまでもない。僅かに島崎藤村があつて、この人の如きは他の標準よりすれば、當然入選して可なるものと思はれるが、何故か左様な風聞さへも聞かない。三面記者諸君がこしらへ上げた大御所や文豪は山ほどあるやうだが、我々の眼では見分けがつかぬ。

かういふ現象を見ると、日本の文學ほど貧弱なものはない、お恥かしきの限りのやうなものだが、これをまた他の方面から見ると、世界無類の異彩が無いとはいへない、これは馬琴にしても、紅葉にしても、漱石にしても、一切、みな日本の國民間で育て上げた作家で、外國のやうに王室や政府の保護獎勵を絶対に受けてゐないといふ事である。日本の文學だけは、たとへ、貧しくとも、狭くとも、日本の國民が作つたもので、時の權力者の保護獎勵を微塵も受けてゐないものであるといふことに於て、世界無類の特色があるとはいへる。さうしてこの特色は將來に於ても失ひなくないやうな心地がする。

保護を受ける獎勵を蒙るといふことが悪いことではない、また徒らに反抗や獨立を街ふは卑しむべきことで、國民が作つたといつても、その國民は日本帝國の皇室のお蔭を蒙つてゐる國民で、保護獎勵を受けないからといつて、政府の政治の下に生きてゐる國民の仕事だから、絶對的の獨立自尊を誇る由は無いのだが、相對の意味に於て文學だけは、純粹民間で育て上げられて來た。「海内文章落布衣」といふ矜持にまた愛すべきものがある。

今や、統制の世である。有ゆるものが官の力で規畫統合せられんとする、文學も亦その道に急ぐこと頗る結構である。たゞ、心の矜持はそれと無頓著に、いよ／＼旺盛であつて差支へない、矜持が無ければ創作が無い、いや人間が無い、奴隸があるばかりだ、奴隸には大文學も起せなければ大國家の建設も出來まい。

時勢に思ひ及んで、つい／＼、序文が長くなつてしまつた。長くなりついでに、挿繪であるが、これも小説の景物として、無かる可からざるものゝやうになつて來た。

それが嵩じて大菩薩峠にのみ起つた「挿繪問題」といふやうな不祥にして憫笑すべき事件まで捲き起つて來たことは慚愧の至りである。本來をいへば創作には挿繪は無くてよいものである、無いのが本筋で、有るのは景物である。錦上花を添ゆるとか泥上に淤を置くとかいふこともあるが、錦は錦、花は花、泥は泥、塵は塵として、玩賞掃除する方が正しい、だから、小説の劇化や映畫化等も、成るべく避けた方がお互ひの爲に宜しい。そんなやうな次第から、大菩薩峠も挿繪の有る事が慣例だとあつて見れば、他の如何なる名家不名家に依頼するよりも、著者と同心一體とも稱すべき遊於道人を煩はすに越したことは無いと考へ、實は前卷「京の夢、逢坂の夢」の卷の挿繪も主として道人の筆に成るものであるが、その成績は案外世間の評判がよろしい、占めたものだと感じた、今後、引つゞき道人に依頼することにして、この話を道人に持ち込むと、道人はくすぐつたい面をして、「なあに繪を描かしたつて、大した事は出來ないがオツルナーやショツパー位の事はやるよ」と濟ましてゐた。黙つて描けばいい

のに、賞めると直につけ上がるのが道人の瑕である。

大菩薩峠の著者は別に「百姓彌之助の話」といふ、ちつとも面白くない小説を逐次発表してゐるが、これは多くの退屈と辛抱とを用意して、世上の君子に讀んでいたゞきたいものと思つてゐる。

紀元二千六百年末

武州西隣塾にて

著

者

目次

序

文

.....

三

山

科

の

卷

.....

三

前卷までの梗概

.....

梁取三義

..... 四三

題
字

裝
畫

口
繪

道
重
信
教

橫
山
大
觀

著
者

編纂責任

梁 寺
取 島
三 榎
義 史

四十
山
科
の
卷

一

過ぐる夜の事、机龍之助が透き通るやうな姿をして現はれて來た、逢坂の關の清水の蟬丸神社の鳥居から今晚又しても夢のやうに現はれて來た物影があります。先晩は一人でしたが、今夜は、どうやら二人らしい。

その二人、どちらも小粒の姿で、事によると、子供かも知れない。石の階段をしとくと下りて、鳥居のわきからからまるやうにして海道筋へ姿を見せた二人は、案の如く子供でした。いや子供ではないけれど、ちよつと見た目には、子供と受取られてもどうも仕方がない。青年にしても、成人にしても、世間並よりはグツと物が小さいのですが、事實上子供でないことは、今、海道筋へ現はれたところを、もう一應篤と見直しさへすれば、すぐにわかることで、第一、この夜中に子供が二人で、こんな處を夜歩きをする筈がないではないですか。

前なるが寒山子、後ろなるが拾得、どこぞの寶物の顏輝の筆の魂が抜け出したかと、一時は眼を見はらざるを得ないのですが、再度、篤と見直せば、左様なグロテスクではあり得